地域づくりと風土をめぐるツーリズムの可能性

愛媛大学法文学部人文学科
観光まちづくりコース准教授　井口　梓

1．はじめに

「観光まちづくり」という視点が、地域づくりやまちづくりに取り入れられるようになって久しい。「まちづくり」は、地域住民が愛着と誇りを持って暮らせる物的・社会的環境の維持・創造することを目的に、住民が主体となって（あるいは主体の一部を担い）、自らが責任を担える空間的範囲・生活圏でおこなう、終わりの無い永遠の取り組みである（西村2007）。一方、「観光する」という言葉は、日常生活圏から離れ、異なった自然、文化等の環境の中でおこなう一連の行動を指している（香川 2007）。我々が暮らす日常生活の舞台には、まち（むら）を構成するひと、住まいや食べ物、衣、産業、祭り、民俗行事などがあり、その積み重ねが歴史や伝統、地域文化を形作る。そして日常の生活圏の外には、自身の地域とは異なる風土と風土を活かした生活・暮らしが存在する。つまり、風土に根差した地域の固有性や多様性、その差異が、観光では最も重要な「非日常」に触れる楽しみを生み、観光対象としての魅力となる。以上を踏まえると、「観光まちづくり」とは、地域が主体となって自然、文化、歴史、産業、人材など地域のあらゆる資源を活かすことによって交流を振興・促進し、活力あるまちを実現するための活動であるといえる。

観光立国推進基本法には、観光が「地域の住民が誇りと　愛着を持つことのできる活力に満ちた地域社会の実現を促進し、我が国固有の文化、歴史等に関する理解を深める」とある。つまり、今後の観光をめぐる様々な活動の主体は観光客ではなく、地域住民が主体であり、魅力ある観光の前提には、活き活きとした地域の存在が不可欠である。筆者は、観光が地域の全ての問題を解決するとは決して考えていないが、第３者からまなざしを向けられることで、地域住民が改めて、地域に対して誇りや愛着をもつ契機となり得ると考えている。

「観光まちづくり」は、いわゆる観光地におけるまちづくりのように聞こえるが、多くの観光まちづくりは、いわゆる観光地ではない地域が取り組んでいるものである。たとえば、地域が持続的なコミュニティの維持を目指してまちづくりをおこない、町並みや地域文化の継承に取り組んだことで、外部から人が訪れ、観光振興につながる観光まちづくりが挙げられる。また、このような活動が注目され、地域振興のひとつとして観光まちづくりが位置付けられるようになると、観光客や来訪者の視点を取り入れながらまちづくりをおこない、まちづくりと観光振興を連動させて取り組む観光まちづくりもみられるようになった。とくに前者のまちづくりは、地域づくりが主導し観光振興が目的・目標ではない場合が多い。いずれにせよ、地域の主体的な地域づくりが地域資源の価値を高め、そして観光対象として第３者に評価される契機につながっている。

一方で、昨今の観光まちづくりには課題もみられる。有形無形の地域資源に観光対象としてのテーマや物語性を与え、時代の動向や流行に合わせた観光プランに組み込むだけでは、長い年月をかけて築かれた地域資源の価値を見出したとは言い難い。地域の自然環境、歴史、伝統、文化、社会、産業の価値を地域の中でどのように活用し持続させていくか。この難しい課題を考えるにあたり、アプローチの糸口として三澤勝衛の論じた「風土」という概念を取り上げてみたい。「風土」という言葉は、広辞苑によると「その土地固有の気候・地味、自然条件、土地柄」を指す一般用語である。三澤が提唱した「風土」とは、「大地と大気との接触面」から生み出されるものであり、産業や人々の暮らし、歴史、文化の根源となる。この風土の微妙な差異が、それぞれの地域の人々の知恵

と相まって産業や暮らしに反映され、地域の固有性や独自性を生む（三澤2009）。

筆者は、この風土こそ今後の地域づくりと観光振興に重要な視点であると考える。「風土を産業や生活の中に織り込む」とは、自然環境や地域条件と調和した暮らしや産業が成り立つことであり、調和した暮らしや産業は風土の一部になる。高地や低地には特有の環境に応じたそれぞれの住まいや衣服があり、漁村や農村にはそれぞれ異なる生業や習俗がある。温暖地や寒冷地には異なる文化が存在し、それぞれの地域の立地条件によって互いに影響しあい、さらに多様な文化を生む。本稿では、この風土への視点を活かした地域づくりの事例として、沖縄県石垣市白保地区を取り上げる。

２．石垣市白保地区における持続的な地域づくり ー風土と文化を地域づくりに生かすー

⑴子供たちによる「白保ゆらてぃく地図」の制作

沖縄県石垣市の南東に位置する白保地区は、2010年の人口が1580人（世帯数677）の農村地域である。1960年代から、新石垣空港の建設予定地として賛否を問う住民活動により注目を集めた地域でもある。白保地区の地域づくりは、地域の自然環境や伝統的な文化、地域固有の暮らしを次世代へ継承するための取り組みが特徴である。このような地域づくりの契機となったのが、2004年に沖縄県の離島・過疎地域ふるさとづくり支援事業を用いて実施した「ゆらてぃく白保村体験事業」（事業費600万円、うち沖縄県300万円、石垣市300万円負担）である。事業の実行委員会は、公民館や老人会、婦人会、青年会、学校教育機関、農業団体、伝統文化を受け継ぐ地域団体、WWF しらほサンゴ村など、白保地区の地域づくりに関わる様々な組織によって構成され、事業の主な取り組みとして「体験・感動プログラム」「創造・交流プログラム」「地産・地食プログラム」「次世代プラン」の４つの班が設けられた。注目すべき取り組みは、この「次世代プラン」づくりの一環として取り組まれた「白保ゆらてぃく地図」の制作である。ゆらてぃく地図は、白保小学校の児童が白保集落を歩きながら、児童の視点から集落の良い箇所や後世に残したい箇所を記録し、地域住民に聞き取り調査をしながら地図にまとめたものである。この地図づくりでは、井戸や屋敷囲いなど伝統的な文化資源のみならず、児童らが小学校の校舎から眺める赤瓦の集落と海の景色に愛着を抱いていること、また校庭の三本木、フクギの屋敷林の木陰や登る木、道、海岸沿いの護岸など、児童が遊び場として利用する場所も明らかとなり、親世代・祖父母世代である地域住民が子供たちのために日常生活を守りたいと思う契機となった。一方で、集落内に児童らの遊ぶ場所が減りつつある問題点も指摘され、集落内における子供たちの遊び場や散歩道などのルートづくりに取り組み、集落の伝統的な景観や緑地、海岸眺望などを保全する重要性が再確認された。

住民が地域を見直すために地図を制作することは、まちづくりの手法のひとつであり、地域づくりのきっかけとして有効である。一方で、ワークショップでの地図の活用については，地図を広げ話し合うことを目標にしてしまい、地域を見直す行為にとどめてしまうという課題も挙げられる。本来の地域マップづくりは、この成果を今後のまちづくりにどう活かすか、その可能性を探り、実際のまちづくりとして行動に移していくことが重要である。白保地区ではこのような地図制作を通して子供たちの意見を参考にし、住民を対象とした地域の未来ビジョンに関わるアンケート調査を実施し、座談会での議論を重ね、地域住民の意見を踏まえた「ゆらてぃく白保村づくり基本方針」をまとめた。この提案書をもとに、数々の話し合いを経て、2006年には白保公民館の総会により「白保村ゆらてぃく憲章」が制定された。

⑵「白保村ゆらてぃく」憲章と生活圏を意識した地域づくり

白保村ゆらてぃく憲章は、（１）地域独自の文化を守り、（２）サンゴ礁および地域の自然環境との共存、（３）町並みの保全、（４）地場産業の育成、（５）教育力の向上、（６）スポーツ・健康づくり、（７）地域住民の団結に関わる７箇条と、これらに関わる具体的な施策内容から構成されている。白保ゆらてぃく憲章における施策内容は、芸能や風習、祭事など地域文化の保存継承の方法や、自然環境の保全と活用、農業・漁業の活性化、地場産業の推進、特産品づくり、子供の育成をはかる教育組織の連携など、詳細かつ具体的に明記されており、この地域が目指す地域づくりの方向性が誰にでもよく分かるように

なっている。また、子供たちが地域の何気ない風景に愛着を抱いていたように、地域に対する「誇り」や「愛着」、ともに協力し地域づくりに取り組む「団結心」など無形の資源について明記されている点も特徴である。この憲章は、2004年の地図づくりから始まり、さまざまな世代が取り組んできた地域づくりの成果が踏まえられた形となった。

現在、白保ゆらてぃく地図は、集落範囲をまとめた「今編」のほかに、同じ集落範囲の地図で、高齢者の聞き書きをもとに作成された昔編（戦前・戦後）、そして集落範囲に加え、サンゴ礁海域まで広げた「広域編」がある。（写真１）

写真１　集落の入口に掲示されている「白保村ゆらてぃく地図」（2010.9.3撮影）

ａ．今編

ｂ．昔編（戦前・戦後）

ｃ．広域編

この「広域編」地図の海岸線沿いには、漁家ごとの定置漁具（インカチ）が記され、さらに沖には地域住民が使う地名が記されている。この広域編地図は、地図情報を伝える役割以上に、農業と漁業を生業として暮らしてきた地域固有の生活文化とその生活圏が分かるようになっており、同時に地域住民にとって自分たちが取り組む、かつ責任を果たすべき地域づくりの範囲が認識できるようになっている。私たちが地域づくりに取り組む際、最小の単位として行政界が基本となるが、自然環境の視点からみれば隣り合わせの地域は互いに連携して取り組まなければならない課題も多い。白保地区では、かつて空港建設問題を契機に地域のアオサンゴ礁の保全に取り組むようになったことで、集落内の美観づくりや田畑の環境整備に取り組むことが、集落の範囲を超えて、さまざまな地域が共有する河川や海の保全につながるという「気づき」があり、その姿勢が現在の地域づくりに表れている。

山間部の地域づくりは、中山間部、さらには平地部、都市部につながっている。境界を超えて地域が相互に連携をはかることは時には困難な作業であるが、昨今のさまざまな地域問題は周辺地域と連動しており、周辺地域が課題や方向性を共有することが重要である。地域住民に「生活圏」を意識させた白保地区の地域づくりは、地域固有の風土について住民が考えた結果であり、広域連携に関わる問題に一石を投じる取り組みであるといえよう。

現在、憲章の施策のひとつとして、白保地区では石垣積みの景観整備に取り組んでいる。祭事の際に通る道（カンヌミチやンガマミチ等）を中心に、家主の理解を経てブロック塀を取り除き、地域住民のボランティアによる石積み修復作業が行われている（写真２）。この石積み作業には、高齢者から小学生まで幅広い世代の住民が参加しており、地域住民同士の交流の機会として、高齢者が生きがいを感じたり、移住者が地域住民とコミュニケーションをとったりする重要な機会ともなっている。またこの石積みの整備を中心に、赤瓦や福木並木など地域の歴史や伝統文化について地域住民自身が学ぶ勉強会「白保学講座」も開催されており、地域住民主体による「公

写真２　地域住民によって復元された石垣

（2012.3.21 撮影）

民館指定文化財」の選定にも取り組んでいる。修復された石積みのある赤瓦の家屋では、家主の協力により庭や家屋が開放され、「ゆらてぃく文庫」と婦人会の共同活動として児童と母親による定期的な読み聞かせ会や遊具づくり、クリスマス会が開催される。子供たちが誇りに思う石垣の屋敷囲いは地域住民によって修復され、子供たちが集う場所へと再生された。地域づくりを通して、地域の伝統的な資源を発掘し、その歴史を確認・整理する取り組みは、歴史的な価値を記録するための作業であるのみならず、今後この資源を地域住民がどのようにして保全活用していくか、現代的な存在意義を問う作業でもある。白保地区の歴史を受けつぐ石垣は復元され、現在は地域住民の交流拠点として新しい意義を持ち、かけがえの無い地域資源となっている。

⑶白保魚湧く海保全協議会による地域資源の保全と活用

白保地区では、憲章づくりの動きと並行して、海域の保全・活用に関わる地域づくりに取り組んできた。集落の接する海は、学術的に貴重なアオサンゴの群生が繁殖するサンゴ礁海域であり、同時に白保地区の住民にとって重要な魚場、あるいは農家の「おかずとり」の場でもある。地域住民が主体となって地域資源を保全・管理・活用するために、その活動組織として、2005年に「白保魚湧く海保全協議会」が組織された。協議会は、「地域の持続的な発展」を目標に、サンゴ礁海域における伝統的な利用形態の維持や周辺の自然環境・生活環境の保全と再生、およびそれらをめぐる地域資源の持続的な管理に取り組んでいる。構成員は、白保公民館や農家、漁家など白保の地域づくりに参加している地域住民のみならず、白保で観光事業に携わる民宿経営者やシュノーケル業者なども参加している点が特徴である。石垣島は、ダイビングやシュノーケルを目的とした観光客が多く訪れる地域でもある。協議会では、「観光事業者」「レジャー利用者」「おかずとり・漁業者」「研究者」それぞれの利用ルールを制定し、地域づくりの方向性の1つとして観光コントロールをおこないつつ、生活を優先した持続的な地域資源の活用を目指している。

「魚湧く海」という言葉は、禁漁区の制定や稚魚の放流など資源の増殖のみならず、サンゴ礁の海をめぐる地域の文化を継承していく活動も指している。2006年には、地域住民らの手によって定置漁具「海垣（インカチ）」が復元された。海垣は浅瀬に半円の形に石垣を組んだもので、魚が潮の満ち引きによって海垣にかかる伝統的な漁法である。復元された海垣は、白保小学校や中学校の体験学習の一環として利用されており、白保地区における半農半漁の暮らしを伝える象徴として、地元学の中心的な存在となりつつある。

⑷地域づくりの成果を活かしたエコツーリズムの展開

白保地区は、新石垣空港の建設を契機に、地域の自然環境や住環境を維持できるかどうか、転機を迎えていた。雇用先がないため若者が流出し過疎・高齢化が進む一方、2000年代後半からは急激に移住者が増加し、伝統文化の継承やコミュニティの結束をどう維持して行くかが大きな課題となった。白保地区の地域づくりは、地域の文化や固有の風土、地域資源を見直し、それらを維持・継承する地域システムの構築と運営を核としたものである。海や集落それぞれで伝統文化を守るための活動が進み、現在ではこれらの活動が観光資源として注目されつつある。海岸への赤土流出防止策として、魚湧く海協議会が取り組む畑への月桃の定植活動は、学校教育機関の環境教育の場としてエコツーリズムのプログラムが整備されており、海垣の体験や民泊も含め、参加者は地域住民とともに取り組むことでより深く地域の風土について理解することができる。また、地域の農産品や地場産業製品を販売する「白保日曜市」は、子供たちが焼物や織物など地場産業を体験する場や大学生らが伝統芸能を披露する場、地域の民俗誌を伝える語り部や、地域づ

写真３　白保日曜市（2010.8.21撮影）

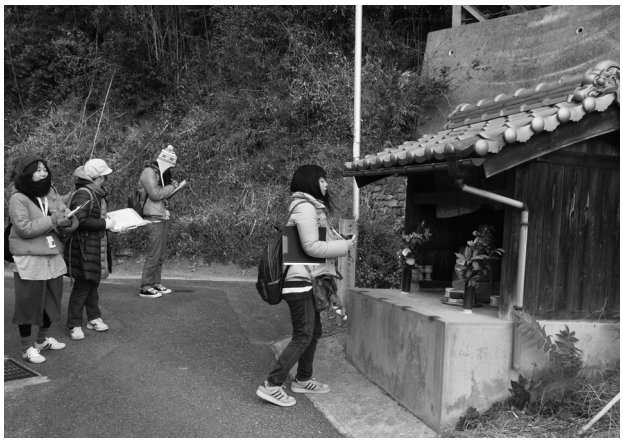
くりの活動展示も提供しており、観光客も多く訪れる（写真３）。この白保日曜市の開催も地域が取り組んできた郷土料理研究会がきっかけである。地域住民は、訪れる人々に多様な地域の取り組みを見て、触れてもらうことで、白保地区の地域づくりの価値を再認識している。

３．まとめにかえて

白保地区の地域づくりは、決して地域の課題を解決するためのものではなく、地域の未来像を形にするプロセスといえよう。１つ１つの活動をみると、地域文化に対して様々な方向からアプローチすることで、住民の誇りや愛着を取り戻すユニークな取り組みが多く、これらに携わる地域住民は苦労しつつも，それを感じさせない楽しみをもっている。これらの活動が多様な組織の連携によって集約され、地域の課題を解決する一助となっていることは言うまでもない。白保地区の地域づくりの根幹には、白保固有の風土とは何かを常に考えることにある。それゆえ、地域づくりから派生する数々のコミュニティビジネスもまた地域資源や人材を最大限に活かした風土産業として成り立ち、白保地区の地域づくりをさらに後押している。

その土地にあったもの生産し、三里四方で獲れた旬のものを地域独自の調理法で食べ、豊かな収穫と自然の恵みに感謝する（三澤2009）。これらは、地産地消、郷土料理、スローフード、食育などに形を変え、いずれも地域づくりの１つとして取り組まれている。農・工・商問わず、風土に即して生産された産物、つまり地域の個性や特色を伝える産物・技術・暮らしを維持継承していくことが地域づくりでは重要であり、他方、観光を通して、それらを手に取る訪問客が農林漁業に携わる人々の暮らしや風土、地域づくりの重要性に目をむける契機となるかもしれない。観光とは、地域住民が歴史的に積み重ねた地域づくり、つまりは風土をめぐる旅である。

白保地区のような可能性をもった地域は、愛媛県に多数存在する。筆者は、上島町弓削島、東温市、内子町において地域と共同で集落のガイドブックや地図制作に取り組んでいる（写真４・５）。これらの地域では、東予の島嶼地域、中予の郊外地域、南予の山間部それぞれの風土を活かした特色ある地域文化がみられ、それぞれの地域づくりにも重要な要素として取り入れられている。ガイドブックやマップは、訪れる人々に地域づくりを観光資源としてPRするためのものである以上に、地域づくりに取り組む人々にとって、自身の活動を誇りに思える重要な機会でもある。地域づくりの形は地域の実情に応じて多様であるが、課題解決や地域の目標に向けて人々が尽力していく時間もあれば、時にはそのプロセスを第三者にPRして、活動を振り返り、誇りに思う時間があっても良い。そのような時こそ、今まで取り組んできた地域づくりの舞台・風土を訪れる人に自信をもって見せてほしい。風土に根差した地域づくりの成果は、ツーリズムの最大の魅力である。



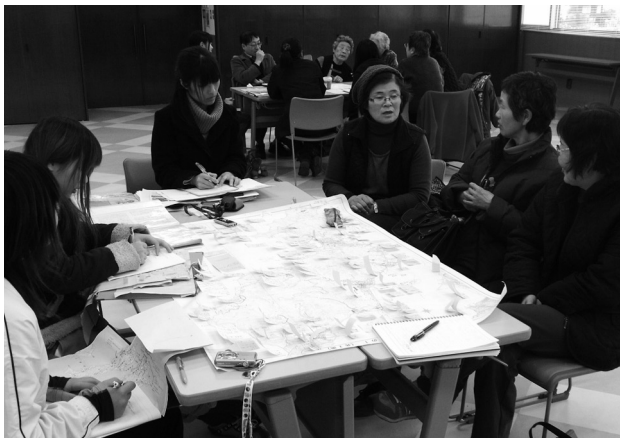


写真４　弓削島における島嶼民俗文化マップ作り

写真５　東温市における水と文化の地域ガイドブックとマップ

参考文献
西村幸男（2007）『まちづくり学―アイディアから実現までのプロセス』朝倉書店，119頁.
香川眞編（2007）『観光学大辞典』木楽舎，388頁.
三澤勝衛（2009）『風土産業（三澤勝衛著作集3)』農文協，360頁.
白保魚湧く海保全協議会　http://www.sa-bu.com/
WWF サンゴ礁保護研究センターしらほサンゴ村
http://www.wwf.or.jp/shiraho/

Profile　井口　　梓（いぐち　あずさ）

現　　職　愛媛大学法文学部人文学科観光まちづくりコース准教授
2008年　筑波大学大学院生命環境科学研究科博士課程修了
2009年　愛媛大学法文学部人文学科観光まちづくりコース特命准教授
2012年　現職
専　　門　観光文化論・博士（理学）
愛媛県観光振興基本計画策定検討委員会、内子町観光まちづくり懇話会アドバイザー、道後温泉活性化計画審議会委員など